

# Sato Project

*Sato Project*

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:[mihosma@chikyu.ac.jp](mailto:mihosma@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



春ですね。城南宮では枝垂桜が見頃です。

<http://www.e-kyoto.net/today/03/08.htm>

「西南中国の漢代陂塘稻田模型について」

渡部 武(東海大学)

# 西南中国の漢代陂塘稻田模型について

渡部 武(東海大学)

昨年の10月30日から11月5日にかけて中国四川省を訪問した。旧知の四川大学附属博物館館長霍巍教授の計らいで、成都市考古文物研究所、綿陽市博物館、広漢市三星堆博物館、樂山市麻浩崖墓博物館、および建設中の金沙遺跡博物館などを見学し、未公開の先秦および漢代の文物資料を熟覧する機会を得た。その中には、以前から関心を抱いていた漢代の農業考古資料「陂塘稻田模型」も含まれており、遅ればせながら、この文物についての覚書をしたためてみた。

## 1) 漢代の陂塘稻田模型との出会い

前漢末から後漢時代にかけて（紀元前1世紀～後2世紀）、四川地方において多くの磚室墓や崖墓が造営された。レンガを積み上げてこしらえる磚室墓の出現については、陝西・河南・山東などの中原地方のほうが古く、またこの墓葬形式は漢代の郡国制度下で中国各地に普及し、さほど珍しくはない。しかし、砂岩質の山地や丘陵地に横穴をうがった崖墓方式は、四川・重慶地方（古風な地名呼称を用いるならば「巴蜀」地方）に集中して見られ、地方的性格の色濃い墓葬形式である。この崖墓について、わが国に最初に紹介したのは鳥居龍蔵で、その著書『人類学上より見たる西南支那』（明治35～36年の調査日誌で、大正15年に富山房より刊行）に樂山地方の崖墓が詳細に記されている。

四川地方の漢代の磚室墓および崖墓の副葬品中に、当時の稲作状況をわれわれに教えてくれる絶好の文物がある。それは考古学者たちの間で「陂塘稻田模型」と称されている素焼き（まれに緑釉をかけたものもある）明器である。陂塘とは一種の溜池で、農業灌漑に利用されるばかりではなく、ハスやヒシの栽培、養魚地としても利用される。そうした情報が子供の粘土細工のように方形もしくは円形の盆上に、陂塘と水田とがセットで表現される場合もあれば、別々に表現されることもある。この明器は中国古代の稲作を理解する上できわめて重要な資料である。その重要性をいち早く指摘したのは考古学者岡崎敬氏（1923～1990年）で、彼は戦後まだ日中の国交が正常化していない1957年に、考古視察団の一員として訪中し、南京博物院で四川省彭山県出土の陂塘水田模型4点をスケッチし、わが国に紹介した（「漢代明器泥象にあらわれた水田・水池」、『考古学雑誌』44-2、1958年）。私は岡崎氏の報告を一読して、このような農業

考古資料にたいそう興味を覚えた。これが私の陂塘稻田模型との出会いであった。

## 2) 入植者と陂塘稻田模型の出土分布の関係

その後、私は四川地方の考古発掘報告を注意深くメモするようになり、かなりの点数にのぼる陂塘水田模型および関連考古資料（とくに四川地方出土の農業関係画像磚）のリストを作成すると同時に、1987年に交換研究員として中国滞在中に成都を訪問し、四川省博物館・成都市博物館および都江堰の伏龍観でいくつかの実物を熟覧する機会に恵まれた。そして、帰国後にそれに関する覚書を白鳥芳郎教授古稀記念論叢（「漢代陂塘稻田模型に見える中国古代稲作技術」、『アジア諸民族の歴史と文化』六興出版、1990年）に寄稿した。

漢代の陂塘稻田模型の分布は、四川地方ばかりでなく、その周辺の陝西・雲南・貴州・広西・広東などの省区にまで及び、四川盆地と広東デルタ地方が二大中心地を形成している。しかもその分布は漢人（あるいはその子孫）の集住する郡治や県治に比較的近い墓葬から出土している。また、四川地方におけるこの種の模型明器の副葬は3世紀の三国時代で終焉を遂げてしまうが、広東デルタ地方では2世紀の後漢時代から4世紀初頭の西晋と東晋の交代期ころまで副葬が継続されていく。両地方では陂塘稻田模型の副葬時期に消長のずれがあり、広東デルタの場合、4世紀初頭の陂塘稻田模型には牛に曳かせる犁と耙（マグラ）が登場してくる。このような現象は四川地方ではまったく見られない。広東デルタでの犁と耙とを組み合わせた水田耕作は、明らかに華北畑作地帯で完成された乾地農法（dry farming）の技術移転であり、それは異民族の侵入や相次ぐ動乱による人口移動によってもたらされた結果に他ならない。

四川盆地で発見された陂塘稻田模型および関連文物中には、犁や耙を用いた俑（泥像）は見られず、最も多く発見されるのは一種の踏鋤である「鍤」という農具を所持した「持鍤俑」ばかりである。鋤先部分の鉄鍤は、漢代蜀郡の官営工房である「鉄官」で製造されたものが広く西南中国に流布していた。この蜀郡鉄官で製造された鍤には「蜀郡」という鑄造銘、および一種のロゴマークが入っている。現在、このような文物が成都市内の骨董市場（杜甫草堂の並びに所在）で堂々と売られている。ときには陂塘稻田模型まで売買されることがあり、それらはすべて盗掘によって得られた物ばかりである。

四川地方における漢代の鉄製犁先の出土事例は、考古発掘情報としてほとん

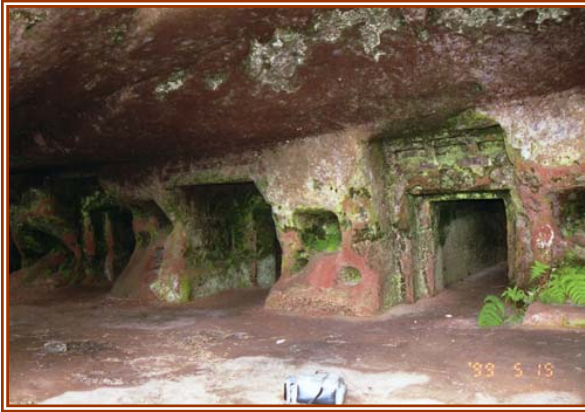
ど入ってこないで、当時における耕作の主流は、牛馬などの畜力を用いての犁耕よりも、むしろ前述の手農具の鍬（柄の装着方向を変えると鍬にもなる）に依存していたのではあるまいか。また西南中国には古くより言語や生活風俗を異にする多くの民族が居住し、生態環境や標高差によって棲み分けを形成していた。戦国期末期に秦が巴蜀を制圧して以後、当地には多くの漢人が強制的に移住させられたり、あるいは自主的に入植したりしてきたが、彼らもやはり先住民族と棲み分けの折り合いをつけながら定住していったと考えられる。というのは、解放後に新中国が採用した湖南地方の貧農の雲南移住政策は、山地焼畑民族地帯（イ族・ハニ族・ラフ族など）と平地稲作民族（主としてタイ族）との緩衝地帯に国営農場を設定し、そこに彼らを定住させて民族間の紛争をうまく回避させているのは、伝統的な統治方法の踏襲に他ならないからである。

### 3) 陂塘稻田模型が副葬される意味

後漢王朝の創始者光武帝が南陽地方（今の河南省南陽市）の豪族勢力をバックに政権の座についたことで象徴されるように、漢代とくに後漢時代は中国各地に豪族勢力が台頭した時代だといわれている。豪族勢力の台頭は墓葬に財力を蕩尽する「厚葬の風」を助長し、各地に磚室墓や画像石墓を流行させた。死後においても日常生活に困らぬように、墓室内部を地上の邸宅を模したようにこしらえ、カマドや井戸の模型、各種の食具などを副葬したのは、厚葬の表れでもあった。しかし、西南中国における陂塘稻田模型の副葬は、自己の社会的地位や財産を誇示するためだけではなく、もう一つ別の意味がこの種の明器に潜んでいたように思われる。

司馬遷が著した『史記』の貨殖列伝中に戦国末から前漢初期にかけて、西南中国へ入植した漢人の消息が記されている。その中で鉄の冶鑄で財を成した起業家を特記しているが、実はこうした類の起業家はごく少数であり、多くは農耕開拓移民であった。戦国期末期に秦国が巴蜀を滅ぼして、成都盆地の西北端の岷江に有名な灌漑施設「都江堰」を竣工した。この大工事によって成都周辺の農耕開発が急速に進み、西南中国の農耕開発の一大拠点が形成されたのである。それ以前は秦嶺の南側、漢水上流域の陝西省漢中盆地が農耕移民の最前線基地であった。北からの漢人移民が移住先の西南中国で成功したのは、畑作地帯で培われた灌漑技術、および単位面積当たり収穫を高める精耕細作の技術の賜物であろう。この二つの技術は、成都盆地よりさらに奥地の辺郡開発においても有効であった。とくに水稻栽培にこれらの技術を応用したことで、周辺の諸民族に大きな衝撃を与えたはずである。陂塘稻田模型とは、そうした入植漢人の後裔たちが考案したアイデンティティと文明のシンボルであったに相違ない。

以下、上記に関連する写真（いずれも筆者による撮影）と簡単なコメントを附しておこう。



○写真1：四川省樂山市の後漢時代の崖墓 土地の人びとは、この崖墓を「蚕子洞」と呼んでいる。砂岩の丘に横穴を穿ち、入り口には木造建築を模した斗栱などが浮き彫りされている。内部には崖棺が造り出されているが、すでに副葬品は盗掘にあって一切失われている。この崖墓は谷戸地形の奥まったところに所在す

るので残ったが、道路側の崖墓群は高速道路拡張工事ですべて破壊された。

○写真2：四川省彭山県崖墓出土の後漢時代稻田模型 この彭山県崖墓は解放前の1941年に発掘調査がなされた。発掘隊長は呉金鼎、隊員には馮漢驥、李濟、夏鼐、陳明達などといった錚々たる人物が名を連ねている。現在、この模型は南京農業大学附属中華農業文明博物館（南京博物院の分館）に展示されている。考古学者岡崎敬氏が見たのはこの模型である。水田は畦で不整形に区切られており、掛け流し式の梯田を示している。田面に稲作を表す小孔がいくつもあ



○写真3：四川省綿陽市博物館所蔵の後漢時代崖墓出土の陂塘模型 陂塘は左右に区切られ、仕切りの中央に水門がある。それぞれの区画内にカメ、魚、カエル、サンショウウオ（？）が配置されている。こうしたタイプの陂塘模型は四川盆地内で多く発見される。



○写真4：雲南省大理地方後漢磚室墓出土の陂塘稻田模型  
円形の盆の上半分がハス、水生動物、水鳥などを表現した陂塘で、下半分が畦で区切られた水田。仕切りの中央には灌漑用水調節の閘門（水門）が設けられている。この模型は大理白族自治州民族博物館に所蔵されている。

○写真5：四川省樂山市麻浩崖墓博物館所蔵の稻田模型 典型的な掛け流し式の梯田で、各水田の畦には水口が設けられている。四川地方の崖墓に詳しい考古学者羅二虎氏（現、上海大学芸術研究院教授）の意見によると、東晋時代の四川地誌『華陽国志』に言及されている「山原田」とは、このような梯田を指すとのことである。



○写真6：陂塘稻田の景観  
この写真は1999年5月に黔江地区の調査からの帰途に、涪陵と重慶のあいだで撮影したものである。漢代の陂塘稻田模型をそのまま再現したような景観に出会い、しばし見とれてしまった。畦に植えられているのはトウモロコシ。



○写真7：漢代に広く西南中国に普及していた鉄鍬  
これは蜀郡の官営工房の鉄官で製造された踏鋤の先端部分で、これに木部の柄が挿入される。両端に「蜀郡」の銘文、そして中央にたぶん工房の名称と思われるロゴマークが鑄造されている。四川省博物館所蔵品。

○写真8：広東デルタ地方出土の西晋時代犁田耙田模型  
この模型は広東省連県から出土した。この種の模型は現在のところ6点ほどが知られており、水田耕作に牛に曳かせる犁と耙（マグワ）とが用いられている。このような農具の組み合わせ耕作方式は華北の畑作地帯で開発されたもので、嶺南地方の広東デルタの水田にその技術移転がなされたものであろう。耙は抄耙といわれるタイプで、これは水田地帯で改良考案された。

